

近未来小説

あすなろ村の惨劇

～そして誰もいなくなった～

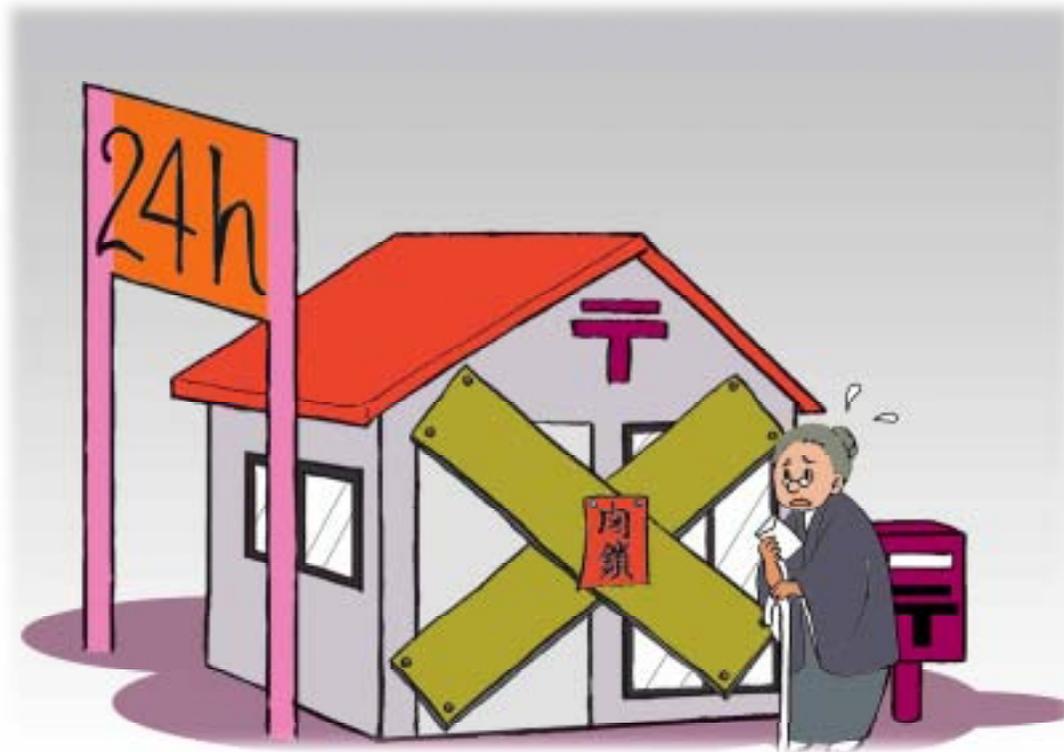




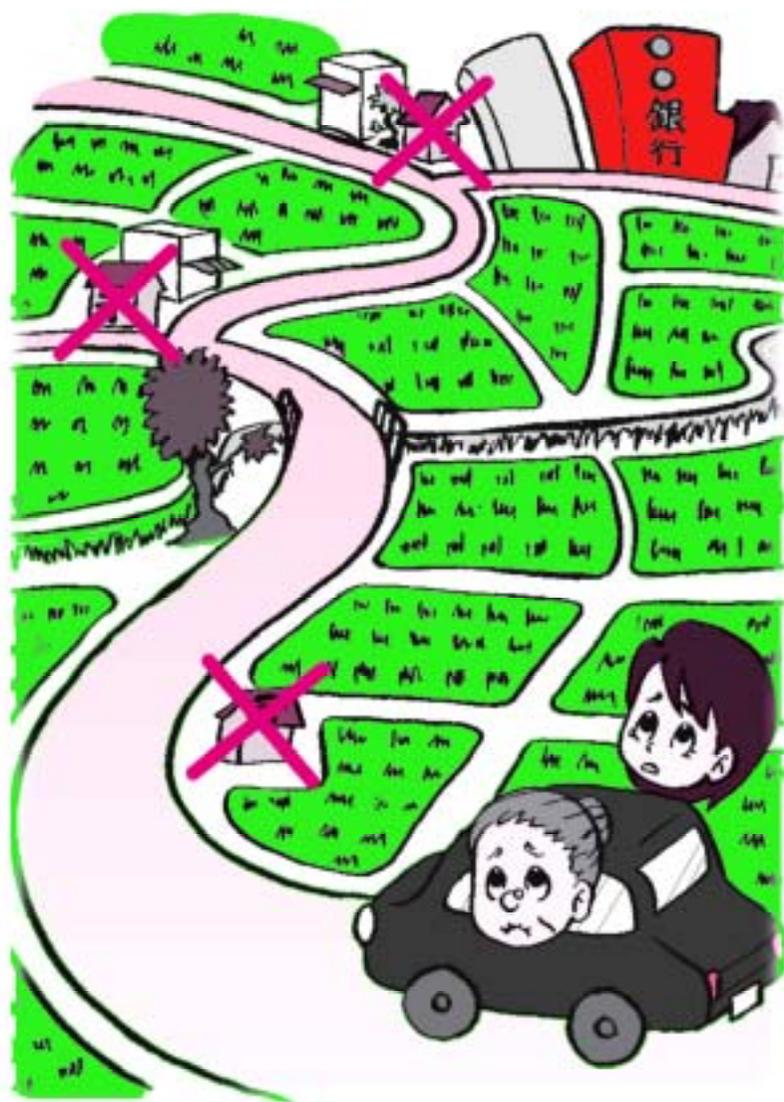
2005年 月×日、大変残念であるが、周囲の良識的な意見にまったく耳を貸すことなく、ついに小泉総理は郵政民営化法案を強引に成立させた。



ここはあすなる村の郵便局。ここでは、民営化の直後から、郵便局の空気は一変した。
この朝も、あすなる郵便局では、局長の大きな声が響き渡る。「みんないいかい、売れるものは何でも売ってくれ。魚も野菜も住宅のリフォームも介護も住宅ローンもすべてやってくれ。周りの商店と競争しないと勝てない。儲けないと局は維持できないんだ」
こうした利益至上主義は、間口一間の店を次から次へにつぶしていった。まさに民業圧迫であった。



いつときは村の商店に競り勝ったあすなる郵便局であったが、状況はこの後一変した。自ら経営していたコンビニの収支が悪化し、人口減少、預金の減少、郵便の減少が相まって、ついには閉鎖の憂き目にあった。
おばあちゃん「便利だったのにつぶれてしまって、お金をおろすのも手紙を出すこともできやしないよ。困ったもんだね」



あすなる村のお年寄りは、今まで郵便局で受け取っていた年金を、30キロも離れた町の銀行に行っておろさなければならない。孫のクルマでの送り迎えも一苦労だ。

おばあちゃんは嘆く。「郵便局がなくなったら本当に不便だね。おまけに八百屋さん、文房具屋さん、クリーニング屋さん、とにかくみんな郵便局がつぶしちまって、本当に困ったよ」
孫「おばあちゃんの言うとおりだわ。毎日クルマで30キロの道のを行くのはガソリン代もかかって大変よ。小泉さんの言うことを信じた私たちが本当にばかだったわ」

郵政民営化反対!



あの2005年の夏、前島密公まで引っ張り出して自民党が作った紙芝居を見てバラ色の未来を思い描いていたあすなる村の人々は、今、ほぞをかむ思いでいる。

そして、誰もいなくなった村には、人気のない閉ざされた郵便局だけが、廃墟となって残されていた。

……おわり